

THE MEMPHITE NECROPOLIS SITE MANAGEMENT NEWS LETTER

No.1 2009

目次

- ・はじめに
- ・2008年度アブ・シール南丘陵調査レポート
- ・2008年度ダハシュール北遺跡調査レポート
- ・第1回研究会報告
- ・第2回研究会報告
- ・あとがき
- ・事務局より連絡



はじめに

吉村作治 Sakuji Yoshimura

サイバー大学学長 / 早稲田大学理工学術院客員教授

1991年から20年弱続けて発掘調査を続けてきましたアブ・シール南丘陵遺跡に新たな展開を観ました。2002年以来、丘陵の周囲の斜面のクリーニングを行ってきましたが、ひととおり終わりましたので、再び頂部の発掘調査に2008年に着手しました。この遺跡の発掘調査を決意しました2001年に、丘陵頂部の中でも最も高い場所にガード小屋を建てたのですが、その周辺が長年の経験から何か埋蔵しているように思えたため発掘したのです。すると、そこにはトゥーム・チャペル（神殿付き大型貴族墓）が存在していたのです。今のところこのトゥーム・チャペルの建造主の名は出ておりませんが、2009年2月にはカエムワセト王子の娘と思われるイシスネフェルトの石棺を納めた墓が発見されたのです。というわけで、文部科学省の科学研究費補助金基盤研究（S）を給付されています「メンフィス・ネクロポリスの文化財保存面から見た遺跡整備計画の学際的研究」の一環の調査でありますアブ・シール南丘陵遺跡の発掘ですが、それを含めて今後私たちの調査の速報を出させていただこうと考え、その第1報として今回のニュース・レター発行としました。今後とも私たちの活動にご理解とご支援をいただけるようお願いいたします。



アブ・シール南丘陵遺跡

アブ・シール南丘陵遺跡はサッカラのジョセル王の階段ピラミッドから北西1.5kmの砂漠の丘陵に営まれた遺跡である。1991年から調査を開始し、これまでにカエムワセトの石造建造物、日乾煉瓦遺構、集団埋葬、岩窟遺構、石積み遺構など、初期王朝時代から新王国時代、末期王朝時代までのさまざまな時代の遺構、遺物が出土している。写真は2008年夏に新たに発見された新王国時代第19王朝のトゥーム・チャペル。



ダハシュール北遺跡

ダハシュール北遺跡はセンウセト3世のピラミッドの北西に位置する墓地遺跡である。1996年に調査を開始し、これまで新王国時代のイバイの墓、バシェドゥの墓、タの墓などが発見されている。ダハシュール北遺跡では、2005年には中王国時代のセマウの墓が未盗掘で発見され、2007年にはセベクハト、セネトイトエスの墓が同じく未盗掘で発見されるなど、貴重な資料が数多く発見されている。写真は発掘風景。地面に数多くのシャフト墓が掘られている。



サッカラの階段ピラミッド



ギザの3大ピラミッド



ダハシュール、屈折ピラミッド

世界遺産「メンフィスとそのネクロポリス：ギザからダハシュールのピラミッド地区」

1979年にカイロとルクソールで開催された第3回世界遺産委員会にて、第86番目に世界遺産リストに登録された。この地域には、古代エジプトの首都メンフィスとその墓地であるギザ、アブ・シール、サッカラ、ダハシュールの遺跡が含まれる。ギザの3大ピラミッドやサッカラの階段ピラミッド、ダハシュールの屈折ピラミッドなど、重要な遺跡が集中する地域である。早稲田隊が調査を行うギザ遺跡、アブ・シール南丘陵遺跡、ダハシュール北遺跡もこの世界遺産の地域に含まれている。



アブ・シールのピラミッド

2008 年度アブ・シール南丘陵調査レポート

吉村作治・河合 望 Sakuji Yoshimura and Nozomu Kawai

サイバー大学学長 / 早稲田大学理工学術院客員教授・早稲田大学理工学術院客員准教授

1991年から文部科学省の科学研究費補助金の給付を受けて調査を継続しているアブ・シール南丘陵遺跡では、2008年夏（7月31日～9月3日）と2009年冬（1月23日～2月26日）に調査を実施し、新王国時代第19王朝のトゥーム・チャペル（神殿付き大型貴族墓）とラメセス2世（紀元前1279-1213年）の孫王女と思われるイシスネフェルトの埋葬室と石棺を発見しました。このアブ・シール南丘陵遺跡では、1991年にラメセス2世の第4王子で、皇太子でもあったカエムワセトの葬祭殿が発見されていますが、墓が発見されたのは初めてのことで、

調査隊は2008年夏の調査で新王国時代第19王朝に年代付けられるトゥーム・チャペル（神殿付き大型貴族墓）を発見しました。発掘調査によって、トゥーム・チャペルは、塔門、列柱のある中庭、角柱のある前室、3つの礼拝室、そしてピラミッドで構成されていたことが当初から判明しました。中庭の西側にはシャフト（竪坑）と思われる落込みがあり、夏の調査では、落込みがシャフトであることを確認した後に、埋め戻し、2009年1月にシャフトの再発掘を行いました。シャフトは未完成でした。その後第2の可能性があるとされるトゥーム・チャペルの前室中央の東側にある角柱の東に直径約1mの円形の穴を発見しましたが、こちらも深さ約3mで掘削が終わっていました。続けて、2008年夏の調査で発掘が不十分であったトゥーム・チャペルの北西部を精査したところ、2月14日にピラミッドの基台の西側でシャフトを発見しました。深さ約3.5mのシャフトの底の東側に穿たれた下降通廊を少し降りると石棺を納めた埋葬室がありました。埋葬室は、トゥーム・チャペルの背後のピラミッドの西端の下にもぐりこむように位置しています。石棺は、良質の石灰岩製で、側面全体に沈め浮彫が彫られ青色で装飾されていました。石棺の形は、古王国時代以来の典型的な両端に突起部が付いた蒲鉾状の上部を持つもので、石棺本体の頭の部分の側壁には、ウジャトの眼が彫られていました。石棺に刻まれたヒエログリフには、「シェプスト（高貴な女性）、イシスネフェルト」と称号と名前が記されていました。この「高貴な女性」の称号は新王国時代には珍しく、王族の女性の例しか知られていません。同じ丘陵の頂部に葬祭殿を造営したカエムワセトにはイシスネフェルトという名の娘がおり、発見されたイシスネフェルトは、カエムワセトの娘である可能性が高いと考えられます。この発見により、今後カエムワセト王子本人、あるいは妻、息子などの墓が周辺から発見されることが期待されます。なお、丘陵頂部で墓が発見されたのは初めてのことであり、これまでのメンフィス・ネクロポリスの新王国時代の墓地の分布が塗り替えられることとなります。



上：イシスネフェルトの墓（シャフト）

トゥーム・チャペルの北西に位置する。シャフトは深さ約3.5mで、埋葬室は東側にある。埋葬室がちょうどピラミッドの下に位置するような構造となっている。

右：イシスネフェルトの石棺

埋葬室には石棺が残されており、イシスネフェルトの名前が記されていた。埋葬室内部からはその他に人骨や象嵌、ファイアンス製鬘、土器などの副葬品が発見された。



2008 年度ダハシュール北遺跡調査レポート

吉村作治・矢澤健 Sakuji Yoshimura and Ken Yazawa
サイバー大学学長 / 早稲田大学理工学術院客員教授・サイバー大学助手

ダハシュール北遺跡は人工衛星によるリモート・センシング調査によって発見され、これまでに「イパイ」、「パシェドゥ」、「タ」の新王国時代のトゥームチャペルや、中王国時代の未盗掘の埋葬が複数発見されています。2004 年からは「タ」の墓周辺を中心に調査を実施しており、2008 年度はその継続です。

第 15 次調査

2008 年 6 月 16 日～7 月 7 日の第 15 次調査では、「タ」墓南側の未掘シャフト群（シャフト 67、91、92、100、101）、および東側の未掘シャフト（シャフト 85、86）の発掘を実施しました。南側のシャフト墓群はすべて長軸が南北方向であり、1 基を除いて南側もしくは北側、または両側に平面が長方形の部屋が掘られていました。シャフト 92 のみ、シャフト部の東側に部屋が掘り込まれています。内部からは、土器片、木片、骨辺、レリーフ片などが出土しました。

東側のシャフト 85 は未完成でしたが、長軸が東西方向のシャフト 86 は深さ 7.6m、上下 2 層の構造で、A～E 室の 5 室を持つシャフトであることが判明しました。

シャフト 86B 室からは、2 点のシャブティ・ボックスの蓋が発見されており、そのうち 1 点はアヌビスの彫像が蓋上部に取り付けられていました。もう 1 点は低いボルト状であり、所有者と思われるパエンレヌウという名前が記載されていました。最下部の E 室からは、最低 4 体の人形木棺が確認されています。2 体は背景が黒色であり、もう 2 体は黄色でした。黄色の木棺は着衣型であることや、透かし彫りのミイラ・カバーが発見されていることから、この埋葬が第 19 王朝以降に年代付けられることがわかります。

第 16 次調査

2008 年 11 月 5 日～12 月 6 日の第 16 次調査では、「タ」墓東側部分の除去、「タ」墓周辺未掘墓の調査、発掘区の北側への拡張を実施しました。「タ」墓東側部分を除去した結果、埋葬は確認できませんでしたが、木製の芯にプラスターで形作られた人型の像の頭部と足部が埋納されたピットが検出されました。

「タ」墓周辺で、全部で 8 基のシャフトの発掘を行いました。主な成果として、シャフト 68 では、埋葬 A 室の入口から、第 18 王朝のネイト大司祭プタハエムウイアの名前が刻まれた 2 本の石灰岩脇柱（ドアジャム）が、間口として再利用された形で出土しました。また、シャフト 110 からは、ラメセス王朝（第 19 王朝、第 20 王朝）期以降に年代付けられる木製の二重人形棺が 2 体出土しました。残存状態が良好であり、「タ」の墓周辺墓域の年代や性格を検討する上で、重要な資料になります。同時に、メンフィス地域でのラメセス王朝期以降の類例が少ないことから、当該地域・時代の埋葬を明らかにするための貴重な資料になるでしょう。



シャフト 86 出土シャブティボックス蓋（アヌビス）



シャフト 110 木棺出土状況

第1回研究会報告

プログラム

日時 2008年5月24日(土) 10:00～12:00

場所 早稲田奉仕園キリスト教会館6C室

10:00～10:05	研究代表者より開会の挨拶	吉村作治
10:05～10:25	メンフィス・ネクロポリスにおける遺跡整備の現状	河合 望
10:25～10:40	メンフィス・ネクロポリスの遺跡予備踏査	青木繁夫・高宮いづみ
10:40～10:55	地質、岩盤工学からの成果	岩崎好規
10:55～11:10	エコ・ツーリズムからの成果	高梨洋一郎
11:10～11:25	保存修復学からの成果	増澤文武
11:25～11:40	総括	近藤二郎
11:40～12:00	ディスカッション (敬称略)	

要旨

2007年度の調査の成果報告を目的として、第1回「メンフィス・ネクロポリスの遺跡整備計画の学際的研究の研究会を開催しました。以下、研究会の要旨を報告いたします。

まず、本プロジェクトの研究代表者である吉村作治氏(サイバー大学長/早大客員教授)より開会の挨拶があり、メンフィス・ネクロポリスという広大なエリアの保存整備計画を策定するにあたって、広大なエリアの保存整備計画はエジプト考古最高評議会が各国隊の協力を得て保存整備を進められているので、早稲田大学が現地で調査を実施しているギザ、アブ・シール南、ダハシュール北の各遺跡をコアとして研究を行い、遺跡整備のサンプルとして提示していくという方針が示されました。

河合望氏(早大客員准教授)は、2007年度の調査の概要とメンフィス・ネクロポリスにおけるエジプト考古最高会議(SCA)や外国の調査隊の保存整備の取組みの現状を発表しました。発表では、科研Sプロジェクトの目的、2007年度に実施されたアブ・シール南遺跡とダハシュール北遺跡を中心に実施された各調査の概要を報告し、エジプト政府の関係機関であるCULTNAT(エジプト文化・自然遺産記録センター)やEAIS(エジプト古物情報システム)による地理情報システム(GIS)データベース作成プロジェクト、イタリア隊による「サッカラ・リスクマップ・プロジェクト」などの近年の動向を紹介し、日本隊による独自性や方針を検討する必要があるとしました。

青木繁夫(サイバー大教授)、高宮いづみ(近畿大准教授)の両氏は、2007年8月に実施したメンフィス・ネクロポリスの遺跡の踏査の報告を行いました。踏査では、景観、発掘調査、環境汚染による影響、保存整備、ガイドンス、観光施設の利便性、セキュリティに注目して、それぞれの現状の問題点と展望が示された。今後、さらに詳細な調



メンフィス・ネクロポリスの踏査



メンフィス・ネクロポリスの踏査

査を実施しつつ、地理情報システム（GIS）データベースの導入が提案されました。

岩崎好規氏（地域地盤環境研究所理事）は、2008年2月に実施したダハシュール北、サッカラ、メンフィス、アブ・ロワシュ、トゥーラの各遺跡で実施した地質学・地盤的な観察を報告しました。ダハシュール北遺跡では、イパイのトゥーム・チャペルにあるシャフトA内部の地質を観察し、地盤工学的安定性の検討のためのつぎのような提案がなされました。①地盤力学的特性を知るためのシャフト壁面の地盤調査、②天井の沈下量の年間計時変化の記録、③温湿度の計測、④クリープ的挙動が見られる際の支保工の実施の必要性。また、ダハシュール北遺跡近傍のガス採取井の活動による地盤沈下の可能性を指摘し、モニターリング体制の必要性が提示されました。サッカラ遺跡でジュセル王の階段ピラミッドの崩壊箇所の様相を示し、緊急対応として支保工の構築が指摘された。ウナス王の参道の擁壁では、積み石の亀裂の変動を計測するモニターリングの必要性が示されました。

高梨洋一郎氏（サイバー大教授）は、2008年2月にサステナブル・ツーリズムの観点からメンフィス・ネクロポリスの諸遺跡を視察し、その成果を報告しました。サステナブル・ツーリズムとは持続型観光のことで、市場の需給のメカニズムに任せ競争原理によって観光産業の量的拡大を図るマス・ツーリズムに対し、資源価値を損なわないよう一定の規制をしたり資源の破壊や劣化に繋がらないよう保全のメカニズムを組み込んでいこうという概念です。ギザ、サッカラ、アブ・ロアシュ、ダハシュール、メンフィスで視察を行い、それぞれの遺跡を観光施設という観点から現状と問題点が指摘されました。大エジプト博物館の建設、アブ・ロワシュのピラミッドの整備、「第2のクフ王の船発掘修復プロジェクト」などにより統合化・総合化されたピラミッド観光の可能性が指摘されました。

増澤文武氏（元興寺文化財研究所名誉研究員）は、ダハシュール北遺跡出土の有機遺物の保存修復のための保存科学的調査を実施しました。保存科学的調査は出土木製品に絞り、肉眼観察、指触、ゴム硬度計、水分チェッカーによる計測を行いました。あわせて、遺物倉庫に収蔵された遺物の保存の現状を調査した。その結果、以下のようなことが指摘されました。①出土木製品は、保存状態が良好で美しい木棺のみならず、劣化状態の少ないものから著しいものまで幅広く出土しており、樹種同定や劣化状態の把握、保存方法の策定が求められる。②これら遺物の劣化状態を把握する最も簡便な方法として、ゴム硬度計によるかたさ試験と電気抵抗式水分チェッカーによる水分値を計測した結果、ゴム硬度計は効果がなく、水分チェッカーは有効であることが判明した。③発掘後の遺物の保管に際し、日較差の激しい低湿度の際には地上での環境について十分注意を要することが示唆された。また、現在の保管場所として、シャフトの地下埋葬室での保管、ならびにポリエチレンの袋内部の保存は急激な乾燥を回避されていることが推測されました。④今後、より一層精度の高い保存科学（狭義）的な調査と研究がなされることが求められる。⑤ダハシュールの遺物等を収納するサッカラの収蔵庫の現状調査と当面する対策と、収蔵庫の保存環境調査案を提案しました。

第2回研究会報告

プログラム

日時 2008年12月9日（火）10：00～12：00

場所 早稲田奉仕園キリスト教会館6F フォークトルーム

14：00～14：05	研究代表者より開会の挨拶	吉村作治
14：05～14：20	今後のプロジェクトの計画案	河合 望
14：20～14：35	メンフィス・ネクロポリス遺跡の踏査報告	青木繁夫
14：35～14：50	衛星画像を用いたメンフィス・ネクロポリスの遺跡調査	恵多谷雅弘
14：50～15：10	ダハシュール遺跡の地質調査に関する報告	岩崎好規・中川康一
15：10～15：30	GIS（地理情報システム）による考古遺跡の調査	津村宏臣
15：30～15：50	質疑応答	
15：50～16：00	閉会の挨拶	吉村作治

要旨

2008年度の調査の成果報告を目的として、第2回「メンフィス・ネクロポリスの遺跡整備計画の学際的研究の研究会を開催した。以下、研究会の要旨を報告いたします。

まず、研究代表者の吉村作治氏（サイバー大学長 / 早大客員教授）から研究の進捗に関して、以下の点のご協力をお願いしたいとの話がありました。①研究会や会議を開催し検討・研究者間で連携する。②研究成果を一般に公表・発表する。③研究成果を教育に還元する。今後の研究については、学会発表、論文を発表する場合は代表者に事前申告していただき、発表後はサマリーあるいは抜き刷りを送付するようとの依頼がありました。今後の調査に関しては、調査項目の提案を受けつけ、調査が可能か否かは研究代表者が代表でエジプト政府考古最高評議会と交渉・調整するとのことでした。また、調査機材については、予算・調査項目の提案を受けて、購入を検討するとのことでした。

次に、河合望氏（早大客員准教授）が今後のプロジェクトの計画案を示しました。まず、メンフィス・ネクロポリスの整備計画の策定までのプロセスを説明し、本プロジェクトの基本的な流れについて発表しました。各分野の成果に関しては、地理情報システム（GIS）・衛星画像・三次元モデルで統合しメンフィス・ネクロポリスの保存整備計画を提示することを目標とするとのことでした。その際、メンフィス・ネクロポリス全体をカバーするのは、調査権の問題から他の外国隊の詳細を調べるのは困難であるため、アブ・シール南遺跡、ダハシュール北遺跡を中心に扱い、他の地域に適用できるモデルケースを提示する計画案を示しました。具体的には、遺跡の現状のコンディション・サーベイを実施し、環境計測器を充実化し、GISを早期に導入する必要性を提案しました。その後、2008年度の調査の概要が報告されました。

青木繁夫氏（サイバー大教授）は、2008年8月に実施したアブ・シール南丘陵遺跡で実施した遺物の保存修復作業と、同年11月に実施したダハシュール北遺跡の保存修復関連調査の概要を報告しました。アブ・シール南丘陵遺跡の調査では、修復記録カードを作成し、写真・図面を含めて出土遺物を統括的に管理していくことが提案されました。遺物の修復に関しては、石灰岩レリーフの表面のプラスターの保存科学的な調査の必要性が示されました。ダハシュール北遺跡の調査では、遺物を一時的に収蔵しているシャフト内部の環境の調査が実施され塩分の析出が指摘されました。今後は、展示しながら収蔵する施設の開設の検討、各遺物の保存処理方法の確立、修復・分析ラボの必要性が提示されました。また、遺物の管理に関して、GISの導入も提案されました。

恵多谷雅弘氏（東海大情報技術センター係長）は、衛星画像の解析と8月に実施した現地調査の概要を報告しました。この調査は衛星リモートセンシングデータを用いたエジプト王朝時代遺跡の現況および立地環境に関する予備的調査で、2008年度の調査では、ザウィヤト・アル＝アルヤーンからマズグーナまでの地域が対象でした。調査の方法は、衛星データの特徴量検討とグランドトゥールースによる地上検証を通じリモートセンシングの視点からの遺跡理解に主眼をおいたものです。現地では、衛星画像において特に損傷破壊の著しい遺構7地点のグランドトゥールースを実施した。踏査を行った7地点は、①セケムケト王のピラミッド、②ザヴェイアト・アル＝アルヤーン、③ダハシュール湖、④アメンエムハト3世のピラミッド、⑤マズグーナ北ピラミッド、⑥マズグーナ南ピラミッド、⑦ペピ1世のピラミッドでした。ピラミッドの現状は、高分解能光学センサーによって観測された衛星画像では全壊と半壊に分類されるが、地表特徴では6パターンに分類されるとのことでした。ピラミッドの立地環境については、ナイル川西岸にあること、川岸近く、砂漠縁辺にあること、氾濫の影響を受けにくいこと、眺望が良いことが条件として挙げられました。上記



遺跡整備の現状（階段ピラミッド）



遺跡整備の現状（ホルエムヘブ墓および周辺）

の7地点の中で特筆すべきは、ダハシュール湖の特徴で、ナイル川の定期的な氾濫を意識しながら計画的に形成された水利施設である可能性が示されました。ダハシュール湖の周辺は軍事施設に近いことから近年まで十分な調査が実施されておらず、ダハシュール湖を中心とした古環境や遺跡形成に関する研究が、今後のメンフィス・ネクロポリスにおける遺跡保護や整備の基礎資料となる多くの知見をもたらす可能性が期待されるとのことでした。

岩崎好規（地域地盤環境研究所理事）、中川康一（大阪市立大名誉教授）の両氏は、2008年11月にダハシュール北遺跡にて地質・地盤学的調査を実施しました。調査項目は、シャフト内温湿度検層、不飽和地盤の表面付着塩、シャフトA内部の地盤岩盤安定性です。前半は岩崎好規氏が発表しました。まず温湿度を分析したシャフトは、23、39、40、17、27で、1mごとの深度で5分間計測を行った。計測は、超小型温湿度センサー（ハイグロクロン）を網袋に入れてメジャーテープに取り付け、0.5m～1mごと5分間定深度に設置し、シャフト底面まで低下させて回収しました。結果は、温度が上がると湿度が相対的に上がるという理にかなった変化であった。ただし、シャフトA、40、17を比較すると若干の違いがあることが認められました。さらにシャフト内部の温湿度環境の状態を把握するには、①地表における温湿度の風力などの気候の連続観測、②シャフト内深度ごとの温湿度の連続観測、③シャフト内の地層の含水比、④シャフト内の人間活動に伴う空気含水量変化の計測などにより、温湿度の年間変化を考究する必要があるとのことでした。後半は、中川康一氏による電気探査の報告でした。ダハシュール北遺跡の地盤中の含水率と比抵抗の関係を明らかにするために、ダハシュール北遺跡のシャフトAの周辺で電気探査が実施されました。電気探査に用いた計器類は、McOHM（応用地質株式会社製）、100mのテイクアウトケーブル、スイッチボックスおよび電極であり、側線長は100mが2本、50mが一本で、鉄棒に銅メッキを施した電極が用いられました。シャフトAのトゥーム・チャペルがある部分は微高地を形成し、地表付近には局所的に褐色ないし黒色の円礫を主体とした礫層が分布しており、電気探査の比抵抗断面では、この部分で高比抵抗部（青色）の厚さが厚くなっていることが判明しました。シャフト24および25では、地表から約5mに砂礫層から岩盤層の境界が存在しており、比抵抗断面では高比抵抗域の底面が、地表面から6mの位置に見られるとのことでした。このように、電気探査によって礫層の堆積が高比抵抗域として認識され、砂漠での電気探査が可能であり、今後地盤中の含水率分布と比抵抗の関係を明らかにしていく必要があるとの指摘がありました。

津村宏臣氏（同志社大准教授）は、GIS（地理情報システム）による考古遺跡の調査についてこれまで関わってこられた調査を例に報告されました。GISとは、地理・空間情報の作成・収集、管理、加工・変換・解析などを表示するシステムであり、代表例としてカーナビゲーターやGoogle Earthがあるとの説明をされました。遺跡への活用では、トルコのカマン・カレホユクの事例を模式図を用いて説明されました。保存修復、発掘、踏査、地質、衛星データを位置座標で統合していく仕組みで、集められた情報は同志社大学のサーバーに集められているとのことでした。具体的なシステムの構成については、ウェブ・ブラウザで入力・閲覧し、マップ・サーバー側で管理・表示・解析して、ブラウザに返す方法を駆使するとのことでした。それに、文献データ・ベースや文化財データ・ベースが追加できます。ディファレンシャルGPS（DGPS）アンテナで基準点を測量し、地球座標を特定し、それに、遺跡、遺構の形状を5～10cmの比高差で記録し、地図を作成します。以前の成果の統合も可能であるとのことでした。今後の課題としては、本プロジェクトでどのようなシステムの設計が必要か議論していただくことが必要であるとの提案がありました。

最後に、吉村作治研究代表から理想論に即して、実際に資金、人材、時間、スペースなどをわきまえ実際論を考える必要があるとの指摘がありました。本日に提案された課題を達成するためのロード・マップが必要であり、見込まれる成果を見込む必要があるとのことでした。最後に、3年目には最終年度までにとこまで達成しているか、さらに5年の申請が必要なのかどうかを含めて見通しをつけたいとして研究会の閉会を宣しました。

あとがき

近藤二郎 Jiro Kondo
早稲田大学文学学術院教授

この度、「メンフィス・ネクロポリスの文化財保存面から見た遺跡整備計画の学際的研究」(科学研究費補助金基盤研究(S))の成果を「ニュース・レター」として発行していくこととなりました。その第1号をお届けします。

エジプト・アラブ共和国の首都カイロ市の南郊には、ナイル川に統一王朝が出現した第1王朝初期(前3000年頃)に王都メンフィス(古代名「白い壁」)が造営されて以来、ギリシア・ローマ時代に至るまで数多くの遺跡が残されています。メンフィス・ネクロポリスでは、巨大ピラミッド群が造営されている北のギザから南はダハシュールに至るまでの地域が、世界遺産に登録されています。早稲田大学が、発掘調査を実施してきた2つの遺跡(アブ・シール南、ダハシュール北)もこの地域に含まれています。メンフィス・ネクロポリス地域は、巨大な人口密集地であるカイロ市のすぐ近くに位置しているため、遺跡の残存状況は、必ずしも良好なものではありません。その上、メンフィス・ネクロポリス地域に存在する遺跡の全容に関しても十分に把握しているとは言えません。そこで、この地域で実施している様々な分野での調査・研究を通じ、メンフィス・ネクロポリス地域における遺跡整備計画の立案を目指していきます。この「ニュース・レター」において、私たちの活動や研究の現状を紹介することができれば幸いです。

事務局より連絡

科学研究費Sの成果の発表については、事前に研究代表者の吉村作治にご連絡ください。また、発表された成果の印刷物(抜刷、学会発表要旨など)は下記の事務局までお送りください。

科学研究費補助金基盤研究(S)

「メンフィス・ネクロポリスの文化財保存面から見た遺跡整備計画の学際的研究」事務局
〒169-8555 新宿区大久保3-4-1 早稲田大学西早稲田キャンパス55号館S棟501号室
エジプト、メンフィス・ネクロポリス保存整備計画研究室
Tel / Fax: 03-5286-3102 Mail: nozomu.kawai@aoni.waseda.jp